回り道こそが強みになる

株式会社コーセー
皮膚・薬剤研究室　皮膚薬理研究グループ
越田　航平さん　KOSHIDA KOUHEI

東京生まれ。2014 年 東京理科大学薬学部生命創薬科学科入学。2018 年卒業。2020 年 慶應義塾大学薬学研究科前期博士課程修了。同年 株式会社コーセーに入社。2025 年 東京科学大学（旧東京工業大学）環境・社会理工学院 技術経営専門職学位課程修了。

敢えて苦手な道を歩んできた

「雪肌精」や「コスメデコルテ」、「エスプリーク」などのブランドで知られる化粧品メーカー、株式会社コーセーに研究者として勤務する越田航平さん。今年で入社 5 年目。

最初に配属された安全性・分析研究室では、数々のヒット商品の安全性保証に貢献してきた。きらびやかな化粧品メーカーにおいて、安全性はいわば裏方の仕事。しかし、「学生時代に専門にしていた、アレルギーや免疫に関する知見を役立てることができ、大変やりがいを感じていました。また安全性にも真剣に取り組む姿勢は、『正しきことに従う心』という行動憲章にも通じる当社の強みだと思います」と語る。

昨年からは、皮膚・薬剤研究室に異動となり、主に皮膚科学に関する大学との共同研究を担当し、人々の悩みに科学的に寄り添うことを目指している。さらにプライベートでは、東京科学大学（旧東京工業大学）の技術経営専門職学位課程（MOT）を修める学生でもある。今年 3 月に学位論文の発表を終え、現在は後期博士課程で学んでいる。

「本来は文系の学問の方が得意」という越田さん。「理系に憧れはありましたが、自分には向いていない。あえて苦手な道を選んで悩み苦しみながら研究を続けてきた」という。今、社会人大学院生として学んでいるのは、主に経営・社会学系の学問であり、本来越田さんが好きだった、文系分野も含まれる。「ばらばらに学んできた 2 つの分野が今、ようやくつながってきたように思います」という。

幼い頃から動物が好きだった越田さん。写真は、小学生の頃飼っていた文鳥と。

麻布中学校 3 年生の頃、定期演奏会の日に部活の同級生と。

好きなことを突き詰めるのがカッコいい

東京生まれ、4 人兄弟の一番上だった越田さん。好奇心旺盛な子ども

だったという。家には図鑑がたくさんあり、それを見るのが越田さんの楽しみだった。昆虫や動物に興味があり、動物園や博物館によく連れて行ってもらったことを覚えている。小学校の頃は科学館の会員になり科学館主催の実験教室にもよく参加した。

理科大オケの同期達と卒団式にて。

政府の留学プログラム「トビタテ！　留学 JAPAN」で選ばれたメンバーたちと事前研修に参加。この時の仲間とは今も交流が続いている。

「親からは『お兄ちゃんなんだから』という育て方はされず、やりたいことをのびのびとやらせてもらいました」と振り返る。妹と二人の弟も、自由に好きなことに熱中していたので、いっしょに遊んだ記憶は少ない。

小学校では積極的に手を挙げるタイプの子どもだった。先生から「君はもう分かっているから他の子に教えてあげなさい」と言われ、友だちに算数などを教えることも多かった。自分が教えることで相手が「分かった」と喜ぶ姿を見るのが楽しくて、「将来は学校の先生になりたい」と思っていたそうだ。

中学受験をして麻布中学校 麻布高等学校に入学。それは人生で初めての挫折体験だった。

「小学校ではできる生徒だったのに、麻布中学の中では自分の成績はかなり下。今までの自分は井の中の蛙だったと思い知りました」

挫折感から勉強へのモチベーションはがくっと下がったが、「ここで挫折経験をしたのは自分にとっては良かった」と越田さん。麻布中学高校は自由な校風でユニークな生徒が多く、おおいに刺激になった。

「世の中にはすごい人がいると知りました。みんな自分の好きなことを突き詰めていた。数学が好きな人は大学レベルの数学をやっていたり、大人顔負けの文学論を語っていたり、模擬国連にエントリーして英語のスピーチをしたり、将棋や漫画を究め、後に本当にプロになった人もいました。『受験勉強をして良い大学を目指す』ことだけにとらわれず、自分の好きなことを究めることがカッコいいという価値観があり、それと同時にお互いの違いを認め合う風潮があったのもすごく良かったと思います」

越田さんが好きなことは、人とコミュニケーションをとって場を一つにまとめたり、みんなで何かを作り上げること。文化祭や体育祭では常に運営係を買って出た。部活では管弦楽部に参加しチェロを担当。本人いわく、楽器がうまかったわけではないが、みんなで音楽を作り上げることが楽しかったからだ。ちなみに理科大時代は大学の管弦楽団の団長を務め、今でも音楽を続けている。

文理選択で悩んだ末、理系の道へ

勉強は「まじめにしなかった」が、唯一好きだったのは理科。これだけは成績も良かった。生物の先生に積極的に質問に行き、生物学オリンピックに参加したこともある。ならば、迷わず理系を選択するのではと思ったが、「文理の選択にはすごく悩んだ」と越田さん。

「理科は得意でしたが、理系には向いていないという自覚はありました。人とコミュニケーションをしたり人と一緒に何かを作ったり表現をしたりすることが好きで、どちらかといえば文系のほうが向いているのではと思っていたのです。一方で、子どもの頃から“科学の分野で何か新しいことを発見する”ということに強い憧れもありました。すごく悩んだ末に“苦手だけど憧れること”を選びました」

進路は決まったが、“受験のために勉強する”ということに抵抗があり、勉強はなかなかやる気になれなかった。結局一浪して、東京理科大学の薬学部 生命創薬科学科に入学する。「生命創薬という名前に興味を持ったからです。ここなら、自分が好きな生物や、人間科学とか生命科学系のことを学べると思いました」

中高とのギャップに戸惑う

理科大は、自由な校風の麻布中学高校とは全く異なり、入学当初はカルチャーショックを感じたという。

「真面目な学生が多く、特に薬学科の人は『医療の分野で学んで人の命を救いたい』という崇高な気持ちで、薬剤師の国家資格取得という明確な目標を持って

学んでいる。すごいなと思いました」

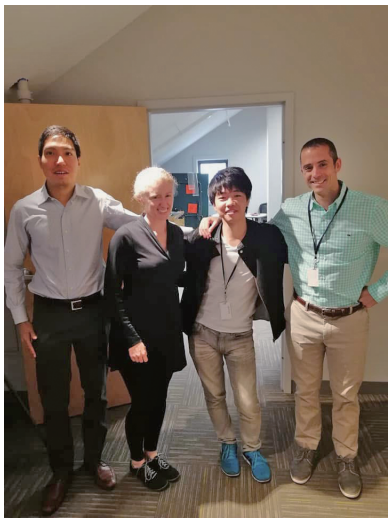
彼らに触発されてしっかり勉強したかというとそうではなく、ギリギリ留年しないレベルの成績をキープ。ただ、生命科学系の授業は「めちゃくちゃ楽しかった」と越田さん。「テストでいい点を取るためではなく、純粋に楽しくて真面目に授業を聴いていましたし、先生にも積極的に質問しに行きました。成績も、生命科学系だけはすごく良かったです」

国立研究所で武者修行

3年生の終わりに自分の研究分野を決める際に、越田さんは食物アレルギーなど身近な生活に関わる現象を研究したいと考えたが、理科大にはそれに該当する研究室がなかった。免疫創薬学研究室の原田陽介先生に相談し、研究生という形で3年次から国立国際医療研究センターの消化器疾患研究部に所属し、消化管免疫に関する研究をすることになった。「ここでの1年間は、私の研究の原点であり挫折の場でもありました」と越田さん。

国立研究所とは、プロの研究者が世界と戦うことを使命として研究をしているところだ。大学の研究室なら、学生同士和気あいあいと研究をしたり、教授や先輩から研究のイロハを教えてもらえたりするのかもしれないが、ここではいきなりプロの研究者として独り立ちすることが求められた。

「これまでは答えのあることを学んできましたが、研究は答えのないことを自分で明らかにしなければならない。研究のやり方もわからず、叩きのめされました。しかし、学生だからと加減せず厳しく指導していただいたことは大変ありがたかった。おかげで研究者としての基礎ができました」


留学中。インターンシップをしていた企業の上司や同僚たちと。右端はCEO。

理科大を卒業後は、医療センターの共同研究先であった慶應義塾大学大学院に進学。薬学研究科薬科学専攻で前期博士課程を修める。

だが、後期博士課程に進むことは選ばなかった。

「自分には向いていない理系の道を敢えて選び、苦労しました。もし、自分が得意なコミュニケーションを武器にするような道に就いたらこんなに苦労しなかったと思います。でも、理系の研究への憧れが捨てきれなかったし、好奇心が強いのでいろいろなことに挑戦したかったのです。しかし、さすがにこのまま博士課程に行くのは厳しい。博士課程に進むとしても、一度社会人経験をしてからのほうが良いのではと思いました」

留学し世界を知る

そこで越田さんは、文部科学省が主導する留学プログラム、「トビタテ！　留学JAPAN」に参加することを決意する。このプログラムは、自分で研究したいテーマや留学先を企画してプレゼンし、審査を通過すれば返還不要の留学奨学金を得ることができるというもの。選考では英語力や学力よりも、プレゼンの新規性や本人の行動力、好奇心の強さが重視される。

越田さんはこれに合格し、米国ボストンの創薬ベンチャーにインターンとして参加することになった。

「ボストンは、MIT（マサチューセッツ工科大学）やハーバード大学などのアカデミアを中心に、病院、大手製薬会社、バイオベンチャーなどが集積してヘルスケア領域のエコシステムをなしている、創薬におけるシリコンバレーみたいなところ。ここでどんなイノベーションが起こっているのか、その現場を見てみたいと思ったのです」

しかし、英語は苦手。「またわざわざ苦手な道を選んでしまった」と笑うが、米国での4ヵ月間に得たものは大きかった。

まず、世界の見え方が変わった。「ホームステイをして、米国のライフスタイルや価値観が日本とは大きく異なることに衝撃を受けました」

日本で当たり前と思っていたことが米国では全く通用しない。しかしそのおかげで、「もし日本にいて日本の風潮に迎合できなくても自分を責めるのではなく『日本が特殊だからだ』と思えるようになった」という。また、遠く離れた国に自分を応援してくれる味方がたくさんでき、仮に落ち込んでも「地球の裏側に応援してくれる人がたくさんいる」と思うと元気になれた。

日本のありがたみや良さにも気づいた一方、自分が「マイノリティ」であることを経験し、「他人に自分の価値観を押し付けてはいけない」と気づいたりもした。

ホストファザーの人生観は衝撃的だった。ホストフ

スノーボードは越田さんの趣味の一つ。会社の同僚たちとよく時間をみつけてはスノーボードをしに出掛けた。

現在の職場の先端技術研究所の同僚たちと。たまたま皆、東京理科大学の卒業生。

ァザーは教育学の大学教員の経験もあり、民主党の市会議員をしていたり地域のジャズフェスティバルを運営していたり、サッカーのレフェリーをしていたり。彼に「本業は何？」と聞くと意外な答えが返ってきた。

「どれが本業でもない。一度しかない人生でやりたいことをやっているだけ」。さらにこう続けた。「あなたも本業に縛られず、やりたいことをやったほうがいい」と。

「こういう考え方を持ち帰ることができたのはすごくよかったと思います」

技術と社会をつなぎたい

帰国後、越田さんは就職活動をして、株式会社コーセーに入社する。

越田さんは、ボストンで見たように、アカデミアと病院、企業、行政が連携し、研究者が活き活きと働ける環境を作りたいと思い、行政に入ることも考えた。しかし国の仕組みを変えるのは時間がかかり過ぎる。企業側から、社会にアプローチしようと思ったのだ。

企業に入って越田さんが真っ先に感じたことは、「面白い研究をすればビジネスがうまくいくとは限らない」こと。研究成果を搭載した自信作が全く売れなくて、意外な製品が大ヒットすることはよくあるのだという。

研究所の中にいたのでは消費者が何を求めているかわからない。もっとマーケティングやオープンイノベーションについて学びたい。そこで、冒頭に述べたように大学院で MOT を学ぶことにしたのだ。

「科学技術社会論、ユーザー調査法、サービス・イノベーション、研究開発戦略など興味深い科目がたくさんあります。ここでの学びを経て、また世界の見え方が変わったと感じました」

共に学ぶ学生は、業種も年齢も様々。それぞれが職場の課題を持ち寄って議論をする。それが楽しい。

今後は、文系理系両方の知識・経験を活かして、社会と科学技術をつなぐようなことがしたいと越田さん。

「両方の知識・経験がある人はまだまだ少ないですが、たとえば科学館の科学コミュニケーターや、企業の研究所や学術機関における広報やマーケティング担当者、科学系のメディアなど、今後活躍の場は広がっていくと思います」

最後に高校生へのメッセージをうかがった。

「私は苦手だけど憧れる理系の分野に進み、挫折を繰り返しながらここまできました。もし自分が本当にやりたいことがあるなら、向き不向きや、将来の就職先があるかなど考えず、そのまま突き進めばいい。失敗してもいいし回り道をしてもいい。人と比べる必要もない。たとえ『やっぱり向いていなかった』とわかっても、それまでの経験は無駄にならないし、最終的にはいろいろやってきた経験は、全部つながる時がくる。回り道こそが強みになるのではないでしょうか」

取材を終えて

敢えて苦手な道を選び苦しみながら成長し続けること。異文化の中でカルチャーショックを受けつつ、異なる考えを受け入れていくこと。様々な経験が今の越田さんを形作っている。「無駄な経験は一つもない。いつかかならずすべてがつながる」という越田さんのメッセージは、将来に悩む全ての人を勇気づけてくれる。

（フリーライター／石井栄子）